

# 上映会 & シンポジウム

## 三池 やま 終わらない炭鉱の物語

2009年6月19日(金) 13:00 - 18:00 (12:00開場)  
立命館大学衣笠キャンパス 創思館 1F カンファレンスルーム  
参加費・事前申込不要

### I部 映画上映 13:00 - 14:50

#### 『三池 終わらない炭鉱の物語』

監督：熊谷博子 撮影：大津幸四郎 制作：オフィス熊谷 配給：シグロ 2005年/103分  
2006年度日本ジャーナリスト会議特別賞 2006年度日本映画復興奨励賞 受賞作

### II部 講演&討論 15:00 - 16:00

熊谷博子 映像ジャーナリスト

×

神谷雅子 京都シネマ代表/産業社会学部教授

×

池内靖子 兼司会/産業社会学部教授

### III部 研究報告 16:20 - 17:50

#### 1. 日本の炭鉱映画史と三池

衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー 友田義行

#### 2. 海外炭鉱映画からの視点 — “KAMERADSCHAFT” 論 —

大学院文学研究科博士後期課程 雨宮幸明

#### 3. 労働闘争のなかの文学 — 三池と文化運動 —

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程 茶園梨加

#### 監督からの応答および質疑応答

司会/文学部教授 中川成美

#### 閉会の挨拶

国際言語文化研究所所長/文学部教授 Charles E.FOX

お問い合わせ：立命館大学国際言語文化研究所 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL:075-465-8164/FAX:075-465-8245 E-mail:genbun@st.ritsume.ac.jp HP:http://www.ritsume.ac.jp/~nakagawa/miike.html



## 熊谷博子監督プロフィール

1951年東京生まれ。TVドキュメンタリー制作を経て、85年、フリーの映像ジャーナリストに。戦時下のアフガニスタンを取材した『よみがえれカレーズ』（89年・土本典昭との共同監督）、自らの育児体験をもとにした『ふれあうまち向島・オッテンゼン物語』（95年）、日本の女性監督たちの格闘を描いた『映画をつくる女性たち』（04年）などのドキュメンタリー映画を多数監督する。著書に『テレビディレクター』（実業之日本社）など。2005年、『三池 終わらない炭鉱の物語』を発表。

「燃える石」は、製鉄工業を飛躍的に発展させ、巨大な船舶や鉄道を動かし、人々の暮らしを一変させた。明治維新以後、日本でも莫大な量の石炭が産出された。それはまた、日本の資本主義化と軍国主義化を押し進める熱源でもあった。三井・三菱をはじめとする財閥の基礎を成した富も、兵器の大量製造を可能にしたエネルギーも、日本最大の火床・筑豊の地底から吸い上げられたのである。だが、帝国主義戦争の中で膨張し、戦後復興を推進してきた石炭鉱業は、朝鮮戦争特需の後に急激な衰退を始める。石炭から石油への転換を表す「エネルギー革命」という言葉は新時代の幕開けを予感させ、石炭産業の衰退は歴史的宿命と捉えられていった。1963年にスタートした石炭政策によって炭鉱は次々と閉山し、1997年には三池炭鉱も坑口を閉じることとなった。

炭鉱の歴史には、影がつきまとう。衰退産業であるというだけではない。筑豊をはじめとした炭鉱には、近代史の傷跡が刻み込まれている。現代のメディアにおいて「坑夫」という言葉が放送禁止（自粛）用語になっていることから伺えるように、炭鉱は時代と社会から排除された民衆たちが流れ込んだ場でもあった。土地を追われ、職を奪われた漁労民、労働者、部落民、囚人、朝鮮人、俘虜、引揚者、復員兵士、戦災市民……様々な人々が坑内になだれ落ち、過酷な環境下で労働に従事した。囚人労働や強制連行といった、「国民の歴史」にとって都合の悪い事実がそこにはある。敗戦後には、炭鉱は大規模な労働争議の舞台となった。英雄的な闘争の一方で、長引く争議はコミュニティの断絶をもたらした。落盤や炭塵爆発事故は後を絶たず、塵肺病やCO中毒病は今も炭鉱労働者を苦しめ続けている。近代日本史の矛盾を凝縮したような数々の記憶は、炭鉱を色濃く覆っている。

しかし、時に「負の遺産」とも称される炭鉱の歴史は、日本が歩んできた道そのものでもある。それを消し去るのは、日本の歴史を消し去ることに等しい。閉山とともに、そこで働いた無数の人たちが生きて来た道や姿まで消してしまっているのか——。映画『三池 終わらない炭鉱の物語』の熊谷博子監督はそう問いかける。三池炭鉱が閉山した翌1998年から構想され、2001年より撮影が開始されたこの作品は、熊谷監督が地元市民や行政の協力を得て作り上げた長編ドキュメンタリーである。「閉山を契機にすべて忘れて前進すべき」との“声”を一方に聴きながら、訪れた炭鉱跡で監督はもう一つの“声”を聴く。それは、かつて地底で働いた人々の“声”であった。

炭鉱は、忘却にあらがうかのように今も強力な“場の力”を持ち続けている。映像作家・文学者・写真家ら様々な表現者がその磁力に引き寄せられて創作を行い、それがまた多くの人々を引きつけてきた。しかし、近年の“廃墟ブーム”に顕著のように、炭鉱は不気味で空虚な異空間として消費されつつある。そこには“声”を聴く契機が欠落している。『三池 終わらない炭鉱の物語』をはじめとした映画や文学は、炭鉱をどのように記録し、描き、捉え／損ない、新しい生命を吹き込んできたか。映画の上映、監督との議論、研究者による報告から考えたい。

炭鉱を語り継ぐ人々の声に耳を傾けると同時に、すでに闇に沈んだ記憶に目を凝らし、残響に耳をすませるシンポジウムにしたいと考えている。多くのご参集を切にお願い申し上げます。（衣笠総合研究機構ポスドク研究員 友田義行）

### 会場案内（立命館大学衣笠キャンパス）



☆会場（創思館1Fカンファレンスルーム）

JR京都駅から市バス50・快速205「立命館大学前（終点）」下車  
市バス205（西大路方面行）「衣笠校前」下車、西へ徒歩5分東門着  
詳細はHP：<http://www.ritsumei.ac.jp/~nakagawa/miike.html>